SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

来し方　行く末
（不虚此行／All Ears）

2023年／中国映画
配給：ミモザフィルムズ／119分

2025（令和7）年4月11日鑑賞 4月29日鑑賞	オンライン試写 テアトル梅田

Data　２０２５－３８

監督・脚本：リウ・ジアイン（劉伽茵）
出演：フー・ゴー（胡歌）／ウー・レイ（呉磊）／バイ・コー（白客）／スン・チュン（孫淳）／ヤン・チンション（楊慶生）／フー・ヤオジー（扈耀之）／ジャオ・チエン（趙倩）／ホアン・レイ（黄磊）／ゴン・ベイビー（龔蓓苾）／シャオリー・ジェンジェン（蕭李臻瑱）

みどころ

今や、中国では第8世代監督の躍進と若手俳優の活躍が目立つが、北京電影学院で教鞭を取りながら14年ぶりの新作を発表したのが1981年生まれの女性、劉伽茵（リウ・ジアイン）だ。

少数与党下にある石破茂政権のキーワードは“熱議”、岸田文雄前政権のそれは“聴く力”だったが、リウ・ジアイン監督の問題意識も“聞くこと”にあるらしい。原題の『不虚此行』も英題の『All Ears』も、「聞くこと」から派生したものだが、それを『来し方　行く末』とした邦題をどう受け止める？

脚本家を目指しても商業的に成功するのは稀。その“成れの果て”が40歳近くになっての“弔辞書き”だが、何の何の、バカにしてはダメ！それだって、誠実に取材し誠実に書き上げれば、「負け組」ではなく立派な職業だ。聞善（ウェン・シャン）という名前の主人公の働きぶりを見ながら、それをしっかり考えたい。人間に二面性があることは明らかだが、ウェン・シャンの“同居人”として登場する小尹（シャオイン）のアドバイスは適切なものばかり。それなのにアレレ、アレレ、ウェン・シャンの行動は？

私も一度だけ大きな葬儀の場で弔辞を読んだことがあるが、それは故人にとっての一大事だから、書く側、読む側にも人生の一大事だ。脚本家崩れとはいえ、そんな仕事を生業としている男を主人公とする映画は、世界広しといえども、きっと本作が初！（売れない）映画評論家としての活動を20年以上続けている私にとって、ウェン・シャンへの親近感はハンパないものだから、本作に見る彼の最後の到達点に大きな共感を持ちながら、拍手！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■劉伽茵（リウ・ジアイン）監督に注目！第８世代とは異質■□■

中国には次々と素晴らしい若手の映画監督が育っている。張芸謀（チャン・イーモウ）や陳凱歌（チェン・カイコー）ら第 5 世代の系譜を受け継ぎ、今や「第 8 世代」と呼ばれている若手監督が、

- 『凱里ブルース』（15 年）（『シネマ 54』103 頁）、『ロングデイズ・ジャーニー　この夜の涯てへ』（18 年）（『シネマ 54』108 頁）の毕赣（ビー・ガン）
- 『象は静かに座っている』（18 年）（『シネマ 54』115 頁）の胡波（フーボー）
- 『郊外の鳥たち』（18 年）（『シネマ 54』122 頁）の仇晟（チウ・ション）
- 『西湖畔に生きる』（23 年）（『シネマ 56』152 頁）の顧曉剛（グー・シャオガン）
- 『小さき麦の花』（22 年）（『シネマ 54』135 頁）の李睿珺（リー・ルイジュン）

等々だ。

それに対して、1981 年生まれの劉伽茵（リウ・ジアイン）監督は、在学中に初監督した作品が高い評価を受けた後、北京電影学院文学部で脚本制作の准教授を務めながら北京中国のインディペンデント映画界において、独自の映画スタイルとテーマ性で知られる映画監督だから、第 8 世代監督たちとは異質だ。すなわち、彼女は、北京電影学院卒業直後、初めての短編『火車』（02 年）を発表して、学生映画コンクール短編部門で最優秀監督賞を受賞。続く初の長編監督作品『牛皮～Oxhide』（05 年）が第 55 回ベルリン国際映画祭フォーラム部門に入選し、同部門で FIPRESCI 賞（国際映画評論家連盟賞）を受賞。続く、『牛皮～OxhideⅡ』（09 年）は第 62 回カンヌ国際映画祭の監督週間に選出されている。以降、彼女は母校での教鞭に集中していたが、この度 14 年ぶりに長編第 3 作目となる本作を発表したそうだ。

ちなみに、前作からここまで大きく間が空いたことについて、彼女はパンフレットの仲の Director's Interview の中で、次のとおり答えている。すなわち、

> 私のメインの職業は教師であり、以前は自分を専業監督とは見做していませんでした。創作というのは条件が整えば自ずと道が開いていくものだと思っていたけれど、私にはその感覚が有りませんでした。私は創作欲旺盛なクリエーターではなく、ペースもゆっくりだし、表現するのも得意ではありません。時間が経てば、内心ますます臆病になり、再スタートがさらに困難に。数年前にようやく自分は映画を撮るのが好きだと意識するに至り、自分自身を再び創作という軌道に戻しました。

なるほど、なるほど。

■□■この邦題はナニ？原題は？英題は？主人公の名前は？■□■

本作の邦題は『来し方　行く末』だが、原題は『不虚此行』。英題は『All Ears』。

『不虚此行』は「この旅は無駄ではなかった」の意味。また、『All Ears』は「耳を傾ける」の意味だが、なぜ本作はそんな原題、英題に？他方、『来し方　行く末』とは何ともヒネった、かつ何とも文学的な表現だが、上記のような意味の原題、英題を、なぜそんなに

大きく意訳して（?）、そんな邦題にしたの？

その点については、本作のパンフレットに収録されている劉伽茵（リウ・ジアイン）監督の Director's Interview で彼女は、次のとおり答えている。すなわち、

> この映画のタイトルは、もともと「聞くこと」に関連したもので、そこから派生して英題である『All Ears』に決めました。なぜ「聞くこと」は重要なのかというと、私にとって聞くという行為は、相手の言葉を体と心で受け止めることを意味します。ただ相手が言っていることを聞くだけでなく、言っていないこと、本当に伝えたいことにも気づかなければなりません。同じ人物について語っているのに、話す人によって内容が異なるのはなぜなのか？その交差点はどこなのか？声のトーンはどうなのか？話しているときの小さな仕草はどうなっているのか？これらすべてをウェンは「聞くこと」で収集します。彼が復元しようとしているのは、去ってしまった人そのものではなく、残された人々の関係性なのです。ひとりひとりが異なる顔、異なる姿、異なる関係性の中で生きています。そのため、私たちは誰かをすぐに、あるいは軽率に定義することはできません。すべての細かな描写の積み重ねが、ウェンがどのように人々の話を聞いているかを描き出しています。

これを読み、その理屈っぽさを理解すれば、彼女が北京電影学院文学部の現役の准教授であることがよくわかる。ちなみに、本作の主人公の名前は聞善（ウェン・シャン）だが、その意味についても合わせてしっかり考えたい。

■□■中国が誇る２人の若手俳優の３度目の共演に注目！■□■

今年 76 歳になった私は、さすがに日本の若手俳優の名前を覚えられなくなったが、それは中国の若手俳優も同じだ。しかし、そんな中でも本作の主人公、ウェン・シャン役を演じた胡歌（フー・ゴー）は、刁亦男（ディアオ・イーナン）監督の『鵞鳥湖の夜』（19 年）（『シネマ 47』198 頁、『シネマ 54』97 頁）での演技が印象に残っている。若手俳優で、日本の妻夫木聡のような国民的な人気俳優らしい。他方、本作で「ウェン・シャンの同居人」と紹介されている小尹（シャオイン）役を演じる呉磊（ウー・レイ）は、顧曉剛（グー・シャオガン）監督の『西湖畔に生きる』（23 年）（『シネマ 56』152 頁）で、マルチ商法にはまる母親を救い出そうとする息子役で注目を集めた若手俳優。したがって、本作で共演するこの 2 人の若手俳優は 2 人とも私はよく知っている。

近時の中国映画は、“国威発揚” を狙いハリウッドとの対抗意識を全面に押し出すド派手な超大作と、「これぞ中国映画」とうならせるような心温まる佳作が両立している。ちなみに、今や中国の若手俳優ナンバーワンに成長した王一博（ワン・イーボー）は、同時期に一方では一大巨編たる『FPU～若き勇者たち～』（24 年）に出演し、他方では 24 分の短編『銀幕の友　我的朋友：All Tomorrow's Parties』（22 年）に出演していたが、中国のトップに立つ若手俳優はその両者を演じ分けているからすごい。フー・ゴーとウー・レイの最初の共演は、中国の古典小説を映像化した『楊家将伝記　兄弟たちの乱世』（06 年）、そし

て2度目の共演は人気TVドラマ『琅琊榜 〜麒麟の才子、風雲起こす〜』(15年) だから、両者ともド派手な演出のものだが、リウ・ジアイン監督の14年ぶりの新作たる本作では、一転して2人とも深い深い内面の演技を見せつけてくれるのでそれに注目！

本作でフー・ゴーが演じるウェン・シャンは、大学院まで進学しながら脚本家としての商業デビューが叶わず、今は葬儀場での弔辞の執筆で暮らしている男だ。本作冒頭、北京郊外の集合住宅の1階にある部屋で、外のベンチに野良猫用の餌を置き、定期的に宮廷を模した巨大な葬儀場と、どこか寂しい動物園を眺める日々を過ごしているウェン・シャンの姿が描かれる。そんなウェン・シャンに対して、ある日、長い間帰郷を避けているふるさとの母親との電話で、ウェン・シャンは「人気テレビの脚本チームにいて仕事は順調だ」と語っていたが、それに対して「本当のことを伝えるべきだ」と“無言の抗議”をしているのが同居人のシャオインだ。本作では、まずこの2人の男の関係に注目したい。

■□■弔辞書きは立派な職業？脚本家崩れの、なれの果て？■□■

本作冒頭に登場する前記の風景は、未だかつて見たことのないシークエンス。だって、地方から北京の大学院まで進学して脚本書きを勉強した男なら、40歳近くになって、真っ昼間から定期的に葬儀場や動物園を観察している生活などありえないからだ。ウェン・シャンのそんな姿を見ていると、母親に対して語っていた前記の言葉が真っ赤なウソであることがすぐにわかる。

しかし、そんな導入部に続いて、ウェン・シャンが北京で火鍋チェーンを営むワン三兄弟から依頼された父親の弔辞作りに邁進している姿を見ると、彼の誠実さがよくわかる。また、ウェン・シャンの良き理解者で、良き友人でもある葬儀場の職員・潘聰聰（パン・ツォンツォン）（白客／バイ・コー）の、ウェン・シャンに対する高い評価を聞いていると、ウェン・シャンの「弔辞書き」としての能力がよくわかる。

ちなみに、私は1980年代の弁護士として最も忙しく、最も充実していた時期に某顧問会社の社長の弔辞

を読んだことがあり、その時の体験は今でも明確に覚えている。私はその弔辞を一晩で書き上げたが、その内容は我ながら見事なものだった。何故それができたかというと、それは、ある交通事故の刑事事件と民事事件を通して、私が故人と共有した濃密な時間の蓄積の重みがあったからだ。詳しい紹介は避けるが、私と彼は、約 5 年間、東京と大阪の往復を 30 回以上共にする中で濃密な時間を共有した。このように、葬儀で故人の弔辞を読むのは「一生の大事」だから、故人と特別に親しい関係にあり、故人のことをよく知っていることが大前提だ。しかるに、脚本家崩れの成れの果てのようなウェン・シャンが、今なぜ弔辞書きとして、それなりに成功しているの？

■□■弔辞作りは難しい！取材は？視点は？悩みは？■□■

「モノ書き」は小説家や脚本家をはじめとして世界中にたくさんいるが、それを職業として成立させている人はごくわずかだ。脚本家として商業的に成功できず、その成れの果てとして、40 歳近くになって（やむなく）ウェン・シャンが営んでいる“弔辞書き”という職業の実態（難しさ）を描く映画は、多分本作が初めてだろう。

本作では、そんな弔辞書きとしてのウェン・シャンが依頼を受ける次の 4 件の仕事を通じて、さまざまな興味深いエピソードが綴られていくので、それに注目！

① 北京で火鍋チェーンを成功させたワン三兄弟（長男・次男・妹）からの依頼
② 急逝したベンチャー企業の創業者の弔辞作成について、その仲間だったルー（ガン・ユンチェン）からの依頼
③ 余命を意識して自らの弔辞作成を決めた女性ファン（娜仁花／ナー・レンホア）からの依頼
④ 地方在住の女性シャオ・ジンスイ（斎渓／チー・シー）からの、自死してしまった声優仲間であるガン・ミンの弔辞作成の依頼

これらのストーリーはそのいずれも、ウェン・シャンが依頼された弔辞作りを誠実に遂行しようとする中で、否応なく発生してくるさまざまなすれ違いやトラブルを細やかに描くものだから、リウ・ジアイン監督によるその繊細な描き方に注目！それにしても、父親や長兄の弔辞作りを依頼するワンさん一家の物語はまだしも、ファンさんの自分の余命を計りながら（?）自分の弔辞作りの依頼や、ネットでつながりながら 2 年前に消息を絶ってしまった声優仲間の弔辞作成を依頼する女性シャオ・ジンスイの物語は、異例中の異例だ。

リウ・ジアイン監督は北京電影学院文学部で教鞭をとりながら、このような企画（脚本）を思いついたわけだが、そこに至った彼女の頭の中の思考経路はいかなるものだったのだろうか？難しい弔辞作りをめぐるウェン・シャンの取材は？視点は？悩みは？それらを本作中盤の展開から、じっくり確認したい。

■□■大学院の恩師との心温まる会話にも注目！■□■

長期継続した安倍政権やトランプ大統領の登場に触れるまでもなく、近時は「勝ち組」

VS「負け組」の対比が顕著だが、本作に見る「勝ち組」は北京で火鍋チェーンを成功させたワン三兄弟（の長兄）だけで、彼以外は全て負け組だ。ウェン・シャンに至っては、冒頭に見る姿からラストに至るまで、一貫して負け組（の典型）だ。

しかして、ウェン・シャンの大学院時代の恩師も、負け組（の典型）らしい。前述のとおり、本作のストーリーはすべて弔辞作りを職業としているウェン・シャンが、さまざまな依頼を受ける中での仕事ぶりで構成されているが、その合間に１つだけ挿入されるのが、疎遠になっていた恩師（孫淳／スン・チュン）とウェン・シャンとの再会のシークエンス。久しぶりに再会した恩師に対して、ウェン・シャンがどんな近況報告をしたのかは知らないが、「仲間と連絡を取れ」と言う恩師に対するウェン・シャンの「私は落伍者です」の答えは決して妥当なものではない。ところが、それに対して恩師から、「なら落伍者の私を頼れ」と言われると・・・。さらに恩師からウェンを葬儀場で見かけたこと、紹介したい仕事があることを伝えられた後に、2 人が即興で、身を隠して葬儀場で働く男の物語を編んでいくストーリーは素晴らしい。そんな２人の別れ際の会話は、「僕には第２幕が一番馴染みがあります」と語るウェン・シャンに対する恩師からの「君への予約は依頼できるか」というものだったから、素晴らしい。

76 歳になった今の私の大学時代の恩師ははるか昔に亡くなっているが、もし今の私にこんな会話ができる恩師がいるとすれば・・・。

■□■ファンの葬儀は？追悼の冊子の表紙は？■□■

本作に見る「弔辞書き」としてのウェン・シャンの最初の仕事は王さん三兄弟からの依頼だが、私が最も興味深かったのは、自分の余命を計算しながらウェン・シャン永遠に弔辞作りを依頼する女性ファンの姿だ。宣告されていた余命を遥かに超えてファンとウェン・シャンとの交流は３年目に突入していたが、本作ラストは遂にファンの葬儀に。

そこでの注目点は、ファンの作成した弔辞がどんな内容なのかだが、本作ではそれが朗読される代わりに、ファンが用意した追悼の冊子の表紙の作者としてウェン・シャンの名前が記されている姿が描かれる。それまでは何度依頼を受けても最後まで書き続けることができなかったウェン・シャンが初めて自分の名前が書かれた創作物を見て、「僕を送り出してくれたのはあなただ」とファンへの感情があふれ出たのは当然だろう。

葬儀から戻ったウェン・シャンに、同居人のシャオインは「僕に、下の名前をつけず、ただ“小尹”と」「本当は心の中で名付けているんだろう」と語りかけたが、さあ、同居人のシャオインとは一体何者？そのネタバレは厳禁だから、あなた自身の想像心をフルに活用してしっかり考えるとともに、ウェン・シャンのこれからの人生に思いを馳せてみたい。

2025（令和 7）年 4 月 11 日記